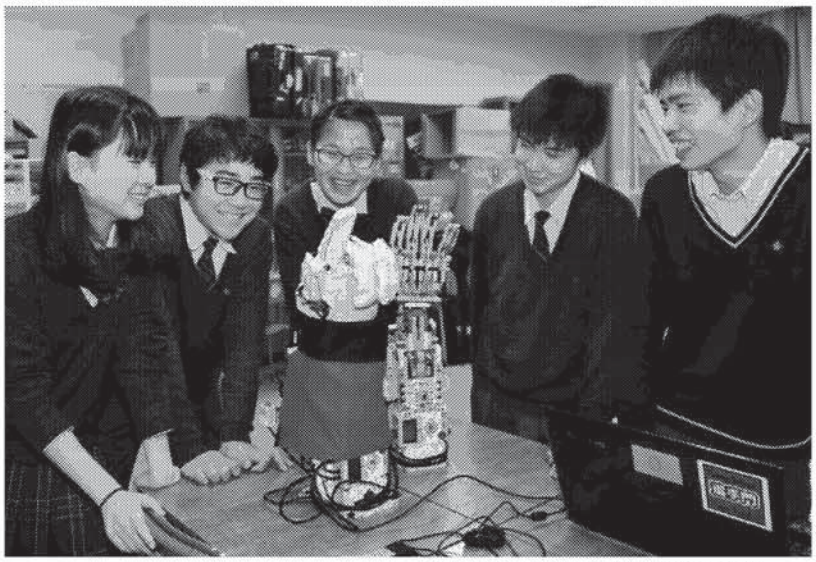
手話ロボ開発 思い伝えたい

大阪の中学生チーム、世界大会へ

大阪市の追手門学院大手前中学のチームが、人の言葉を手話に翻訳するロボットを開発した。9月に東京で開かれた小中高校生向けの国内ロボットコンテストで最優秀賞を獲得、11月には世界大会に挑む。リーダーで3年の辰巳瑛さん（14）は「両親が聴覚に障害があり、手話が使えない人でも耳の不自由な人と交流しやすくしたかった」と話す。



人の言葉を手話に翻訳するロボットを開発した追手門学院大手前中学のチーム（20日、大阪市）

人の言葉を翻訳

リーダー「両親障害きっかけ」

ロボットは高さ約50センチ、幅約25センチ、重さ約3キロで、人の指先から腕の部分の形をしている。辰巳さんらロボットサイエンス部の1～3年生5人が、オリジナルのロボットが作れる部品が入った市販のキットに、音声受信用のタブレット（多機能携帯端末）を組み合わせて製作した。

音声を直接手話に置き換えるシステムがなかったため、タブレットが受信した言葉を色に変換してロボットに情報を送信し、機械の手を動かす仕組みにした。「おはよう」などの簡単な言葉であれば、10秒程度で手話にできるという。

辰巳さんは「母親がロボットを見て喜ぶ姿がうれしかった。いつか実用化につなげたい」とほほ笑む。

コンテストは、ロボットをプログラムで自動制御する技術を競う。同校は授業にロボットやプログラミング教育を積極的に取り入れ、世界大会への出場でも常連校だ。チームが出場する部門は、ロボットの狙いや動作などをプレゼンテーション形式で発表し、その内容で順位が決まる。

世界大会は11月10～12日にコスタリカで開催。チームはさらなる軽量化や、英語でのロボット紹介の練習を進めている。辰巳さんらは「世界の人に最高のロボットだとしっかり伝えたい」と意気込んでいる。

掲載日 2017年10月27日 日本経済新聞 大阪夕刊 大阪夕刊社会面
(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。